

凄六

—SUGOROKU—



『淵六』(SUGOROKU)

作・中野 守 (中野劇団)

登場人物

沖田 (女・二十五歳、担当 音楽)

永倉 (男・三十二歳、担当 化学)

齊藤 (男・三十七歳、担当 体育)

松原 (男・二十三歳、担当 数学)

闇の中に声が響く。

沖田

取扱説明書。

永倉

対象年齢、十三歳以上。プレーリー人数、四名。

松原

セット内容、双六盤、賽子、駒、取扱説明書。

齊藤

すべてのマスには銀はがしの要領で命令が書かれています。そこにかかれた命令

に従いながら、あがりまで辿り着いて下さい。

命令をクリアしなければ、次のプレーヤーは賽を振ることが出来ません。
一度開かれたマスであっても、止まつたマスの命令には従つて下さい。

松原 あがりはオーバーしても構いません。

齊藤 なお、途中棄権は出来ないのでご注意下さい。

間。

沖田 みぶろ中学校職員室。

永倉 三学期終業式の日の夜。

松原 但し、その夜が始まつたのは途方もない昔。

齊藤 終業式の日だったということを忘れてしまいそ、うな昔。

沖田 現在、午後七時三十五分…。

職員室に四人の教師。

赤、青、黄、緑の四色の双六の駒が置かれ、沖田、永倉、齊藤、松原の四人が重い空気の中、双六を

している。四人は憔悴しきった表情。松原は無精髭を生やし、腹痛を煩っている。

齊藤 『もう一度賽子を振り、出た目の数だけ戻る』。沖田先生、もう一回だ。

女性教師の沖田は、齊藤に手伝われながら、大きな賽子を転がす。因みに沖田は、

齊藤 三（出目の数。以降同様）。

沖田、自分の駒を持つ手を、じっと動かさずに思い詰めた表情。

齊藤 沖田先生。三マス戻して。

沖田、動かそうとしない。

齊藤 沖田先生。

沖田 …嫌！

沖田、自分の駒にしがみつくが、まるで駒が沖田を引きずるようにして三マス戻る。

沖田 … 今まで続けるの？

間。

沖田 いつまで続くのよ、こんなこと。

齊藤 あがりに辿り着くまで。ルールは何度も説明した。…銀を剥がして。

沖田、銀を剥がす。

『日本国憲法の全文を暗唱する』

松原 永倉

松原 沖田

…全て。

できるわけないだろ！ ふざけないでよ！ もう嫌！

沖田、感情に任せて泣き叫ぶ。

齊藤

：どうだろ。今日はここいらが限界みたいだ。続々は明日に。

松原

：じゃあ、駒の位置記録します。

永倉

それ、俺がやつとくから。松原先生、今日、飯番。

松原

あ、はい。イテテ。痛み止めまだ保健室に残つてたかなあ。

齊藤

毒なんか盛るんじゃねえぞ。

松原

一番苦しそうなの入れておきますよ。

松原、職員室を出る。

永倉

ただの憎まれ口でしょう。四人の誰が欠けても困ることは彼も重々心得て いるはずでし。

沖田

来る日も来る日も賽子振つて、駒動かして、賽子振つて駒動かして賽子振つて！ いつまでこんなこと続けなきやいけないのよ。

齊藤

沖田先生。悪く考えん方がいい。あがりに辿り着けば終わりは来るから。もう一

度太陽を拭める日が。

沖田

それだって根拠があるわけじゃないでしょ。

齊藤

眩しいんだろうなあ。目潰れるんじゃねえか。

沖田と齊藤、職員室を出る。永倉、自分の席に座り、天井を見つめている。煙草を吸おうとするが、

空箱で、永倉はそれを壁に投げつける。

永倉

太陽か…。

回想。職員室。机の上にはスナック菓子や酒類が置かれている。全員、まだ普段の自分を失っていない。

沖田、駒を進めて、財布から一円玉を出し、銀を剥がす。

沖田

『そらに四マス進む』。ふー。

松原

幸先いいスねえ。

齊藤

普通の双六だよ。脱ぐ系とか多分入ってないだろう。それはそれでつまんないけど。

沖田

松原くーん。これ、四つ進んだマスの銀も剥がすの？

松原

ええと、ちょっと待つて下さい。取説取説。

松原、取説を読む。

松原

沖田

ええ？

ああ、そ、う、み、た、い、で、す、ね。

沖田、銀を剥がす。

齊藤

沖田

先生言えてないし。

齊藤

じゃあ測るよ、せえの。

『十秒以内に「赤巻紙青巻巻黄がきまき」を二回言う』

沖田、赤巻紙青巻紙黄巻紙を早口で三回言う。十秒以内に言えるまでやり直し、言えたら終了。

沖田
はい次、永倉先生。

スピーカーから鐘が鳴る。全員、素早く酒類を隠し、仕事をしているポーズ。

沖田 誰か放送室にいるんじゃないんですか？

齊藤 いや、見回りしたときは誰も…。普段なら野球部や居残り研究会が残っていてもおかしくない時間帯なんだがな。

松原 ちょっと見て来ます。

松原、走って職員室を出ていく。因みに放送室は職員室の隣にある。

齊藤 別にまだ金動かしてないし。

沖田 教師が双六でお金掛けてたなんてバレたらどうなるか…。

永倉、賽を振る。

『出目の数』。

松原、戻って来る。

松原 中、誰もいませんね。鍵かかってるし。

沖田 放送部の子が消し忘れてったのかな。後で消してきます。

齊藤、賽子を見つめながら、誰の所有物なのかとか独り言を呟いている。

永倉 『三回回ってワンドホーと言つ』？ 大したこと書いてねえな。

永倉 沖田 指示に従う。クリアした所で再び鐘が鳴る。

沖田 チヤイム壊てるのかな。

永倉 齊藤先生。

齊藤、駒を振り、止まつたマスの指示を読み上げた後、指示に従う。するとやはり鐘が鳴る。

齊藤

(急に大きな声で) 沖田先生！

沖田

ヒツ！

松原、沖田の驚きを見て笑い転げている。

沖田

酷いじゃないですか、齊藤先生。

齊藤

沖田先生、結構恐がりだな。

沖田

恐がりじゃなくて驚いたんですよ。ジェイソンと同じですよ。

松原

言い訳しますね。

沖田

ほら、次松原先生ですよ。

松原

はいはい。怒られた。

松原、駒を振り、止まったマスの指示を読み上げた後、指示に従う。クリアする直前、わざと躊躇つてみせて、スピーカーに時間差攻撃。数秒待った後、クリアすると、やはり鐘が鳴る。四人、呆然とスピーカーを眺めている。

齊藤

…やつぱり誰かいるんだよ。松原先生が行つた時、隠れてたんじゃないか。教師をからかうとは。

沖田

でも何でこっちの声が聞こえるの？

永倉

悪戯同好会の仕業でしょ。どうせ。

松原

まずいですよ。生徒に見られてたとしたら。

齊藤

俺が見て来る。…そうだ。次、沖田先生の番だったね。続けてくれる？

沖田

はい。

齊藤

永倉先生、今度また鳴つたら、大きな声で知らせて。

永倉

へいへい。

齊藤、駒を振り、止まつたマスの指示を読み上げた後、指示に従う。するとやはり鐘が鳴る。

永倉

(廊下に) 鳴りましたー。

沖田

マジ？

齊藤、戻つてくる。

松原

間違いないですね。あのチャイムはこの双六と連動しています。

齊藤
何、この双六。

永倉
これ、何処にあつたの？

松原
双六同好会の部室に。

沖田
…やめますか？

齊藤
いや、面白い。続けるよな。松原君。

松原
当然！

松原

齊藤、賽子を松原に渡そうとして持ち上げるが、動かない。

松原
へっぴり腰ですか？

松原が賽子を持つと簡単に持ち上がる。

齊藤
それを言うならぎっくり腰だろ。それも違うけど。あれ？

松原 さあ、気を取り直して。

松原、賽子を投げ、駒を動かし止まつたマスのお題を読む。

沖田
『誰かの縦笛を吹く』

縦笛？

永倉 ここには俺と齊藤先生しかいない。

沖田 何言つてゐんですか。音楽で生徒が使つてゐる奴でしょ。

松原 ああ、リコーダー。

齊藤
生徒の机の中にあるでしょ。これは楽なお題だね。

松原
探してきます。

松原、出ていく。

齊藤：昔の生徒が作ったんだな。いかにも子供が喜びそつなお題だ。
沖田：でも、教え子の縦笛舐めるって、セクハラですよね。

齊藤 セクハラ研究会でもそこまでしないよ。

松原 ありました。

齊藤 永倉先生やった口でしょ？ 子どもの頃。放課後誰もいない教室で。

永倉 俺はブルマでしたね。

齊藤 ブ…。舐めるの？

永倉 いやいや、匂いだけですよ。

沖田 今でもやつてそう…。

永倉 そんなにしてません。

沖田 変態。

松原 あの、僕は仕方がないから吹くんですよ。

齊藤 とか言いながらその縦笛はミスみぶろ中、二年五組の城野まどかのじゃないか。

永倉 ホントだ。

松原 ええ？ 気づかなかつた。たまたま見つけただけで。

沖田 二年五組つて確か。

永倉 四階の端。

齊藤

全力疾走して行つて戻つて来たのか？

沖田

え？ 狹つてたとしてもこの短い時間に席を探すなんて…。

永倉

だから、知つてたんでしょ。城野まどかの席。

齊藤

齊藤

確信犯。

沖田

信じられない。

松原

誤解ですよ。落とし物入れの中にあつたのを適当に。

齊藤

ふーん。

松原

何ですかその、電車の中で大声で電話してる人見るような目は。知りませんよ。

松原、リコーダーを吹く。

時間経過。結構飲んだ跡。

松原

僕、そろそろ帰ります。

沖田

何よー。途中棄権なしでしょお。

松原

だって、これ、いくつマスあると思つてんスか。何日あつても無理スよ。

齊藤
永倉

沖田
永倉

沖田
永倉

永倉

何?

沖田
松原
齊藤

いえ。松原先生。急いでるんでしたら、いいですよ。ここ片づけておきますから。
いいですか？ すいません。お疲れ様でした。頭痛で。
お疲れー。

松原、千鳥足で職員室を出でいく。

齊藤
永倉

沖田
永倉

俺、独身。

ああ。

久々にムキになつて遊んだなあ。

永倉先生、こんな遅くなつて、奥さん怒られません?

ああ？ 何その、ああ。

いえ。意味は。

顔
ふ
ん。

•
•
•
•

嫁さんに逃げられたんだ。

ああ。

だから何その「ああ」は？

いえ、別に…。

そう。ていうかさ、自分の方こそいいの？ 時間。

別に。ひとりですか。

あ、ひとり暮らし。じゃあ、この後沖田先生の部屋で、ふたりで飲み直しだな。

何言つてるんですか。

いやさ、うち、今、風呂使えないと。

何勝手に風呂使おうとまでしてるんですか。

質に入れちやつて。：何？ 男が待つてるとか？

沖田 永倉 いいえ。

ならないじゃねえか。風呂貸せよ。

貸せよ？ 全然親しくもないのに、何馴れ馴れしく。…永倉先生ね、評判悪いですよ。
そんなだから…。

…何？

いえ。

そんなだから何？

…前の学校にいられなくなつたんじゃないんですか。

…。

校長と知り合いだそうですね。羨ましいコネクションをお持ちで。

コネクションって。またそんな難しい言葉使って。

別に難しくないでしょ。…前の学校で、何やらかしたんですか？

まあね。

生徒をつまみ食いした。

沖田 永倉 沖田 永倉

永倉、不敵に笑う。

：最低。

そんな勇気ないよ。自分の教え子がひとり不登校になつた。
で？

それだけ。

それだけ？

いなかつたんだ。それまでその学校では。珍しいだろ。今日日不登校の生徒がない学校なんて。学校側がさ、今までそんな生徒は出なかつたのに、これは担任の責任だつつてよ。その学校で俺教鞭振るえなくなつた。
それだけで？ 何か不登校の原因になつてるんじゃないの？

永倉、沖田を睨む。

沖田
永倉
何よ？

学校側はそういう見解なんだろ？

沖田

?

永倉

でさ、失業したと思えば、嫁さんにも逃げられてさ。人生上手くいかないわ。沖田先生は他の男にプロポーズされるし。

沖田

田先生は他の男にプロポーズされるし。
何で知ってるんですか。

永倉

結婚するの?

沖田

永倉先生に答える義理はないと思いますが。
ないよね。

永倉

永倉、壁の時計で時刻を確認。七時三十五分。

永倉

あの時計、止まってる?

沖田

え?

永倉

九時回ってるだろ。幾らなんでも七時半なわけ……。

永倉、腕時計を確かめる。

永倉

あれ?

沖田 七時三十五分ですけど。

永倉 合ってるのか？

松原 (声) うわあ！

間。

沖田 今の松原先生？

沖田と永倉、走って出て行く。暗転。

四人の時間で半日程経過。齊藤、トランシーバーを持っている。

沖田 (トランシーバーに) わかった。ありがとう。松原君、戻つて来て。
齊藤 どうだつて？

沖田 新校舎の一階は全部駄目つて。

齊藤 そつか。松原先生の言つた通りだな。

沖田

どうしたことなんですか？ 松原先生の話、いまいち把握できなかつたんですけど。

齊藤、ホワイトボードに図を書く。

齊藤

うちの学校は校舎がカタカナのコの字になつてて、開いてる一边を塞ぐように体育館が建つてゐる。例の見えない壁は校舎を四角く囲むように存在してゐる。だから中庭には出ることができるけど、体育館には行けない。校舎と中庭。それが我々に与えられた領域……。

沖田

どうなつてんの？

永倉、双六の取説を読んでいる。

齊藤

は？

永倉

やつぱりこの双六のせいみたいですね。

永倉

読みますよ。なお、一度この双六を始めると、あがりに辿りつくまで時間が止まつたまゝになり、一定範囲から外に出ることができなくなります。最後まで諦めず

に頑張りましょう。

そんなわけないでしょ。

普通に考えればね。

齊藤、窓の外を見ている。

すぐそこに外は存在するのにな。これじゃ映画のカキワリと何ら変わりやしない。

これって、閉じこめられてるってこと?

ですね。

いつまでももたないよ。第一食べ物なんか…。

購買部と食堂に幾らかはあるだろうし。

永倉 それと調理実習室と。教師の準備室にも何かあるかも知れない。

米俵研究会の部室に米俵があつたはずだ。

そんな部があるんですか?

去年は県大会ベスト4まで行つたらしい。

あと、家庭科室にあるし、教員の準備室にはみんな冷蔵庫持ち込んでますよ。

沖田

永倉

齊藤

齊藤

沖田

永倉

沖田

齊藤

永倉

齊藤

松原

齊藤

沖田

齊藤

最低限の生活は保障されてるわけか。とにかく、ここには四人しかいないんだ。ふたりが戻って来たら、いろんなこと決めないとな。

暗転。

明転。

永倉、煙草の箱を沢山抱えて登場。

松原

どうしたんですか、それ。

永倉

宿直室にあつた。用務員さんが買いだめしてたみたいだな。あ、クリアしたの？

沖田

ようやく、私の番だ。

齊藤

何巡目なんだろ。時間は止まってるけど、計算では七日経ってるんだよな。七日で全体の三割も進んでないなんて。

永倉

ま、時間は腐る程あるわけだし。のんびりいくしかないのでしょ。

沖田、賽を振り。出た目の数駒を進め、銀を剥がす。

松原

『今後一度だけ、全員の駒を先頭の駒のいるマスまで移動できる』？ え？ あ、成程。

齊藤

いいぞ。ということは私たち三人が松原先生のいる所まで行けるわけか。

沖田

これでみんな一気に進みますね。よし。じゃ…。

永倉

言つな！

松原

何ですか？

沖田

いいよ、松原先生、聞かなくて。

永倉

いいから聞け。

沖田

命令しないで。

永倉

この双六。同じことが書かれてるマスは今までなかつた。多分、残りのマスも全

部そだ。

齊藤

ああ。で？ 何？

永倉

その全員の駒を先頭の駒のいるマスまで移動できるっていうのも、おそらくここだけだ。

松原
永倉

で？

その権利を取つておくんだ。そうしたらこの中の誰でもいいからひとりがアガリに辿り着けばいいことになる。

松原 そつか。今までだと、さつきみたいな『誰かを五〇マス戻す』なんてマスに当たつた場合、遅れてる人をアガリから遠ざけるわけにいかなかつたから、一番進んだ永倉先生が犠牲になつたけど、これからは。

斎藤 ひとりが頑張ればいい。

沖田 沖田先生、取つておきましょう。

永倉 相当嫌われてるんだな。

暗転。

斎藤、賽を振り駒を進める。

斎藤 『この先、疑り深くなる』

松原

何これ。どういうことスかねえ？

鐘が鳴る。

沖田

よくわからないけど、齊藤先生疑り深くなってるわけだ。
じゃあいいんじゃないスか？ 鐘も鳴ったんだし。

松原

齊藤？ 鳴ったか？

松原

今鳴ったでしょ。

齊藤

ええ？ 鳴った？

沖田

次松原君。

齊藤

嘘？ 松原君か？

松原

だって今齊藤先生の番だったでしょ。

永倉

成程。こういうことか。

齊藤

ああ、で、何で次が松原君なんだ？

永倉

ずっとその順番じゃないですか。最初に決めた時から。

沖田

うわ、この先鬱陶しそう。

齊藤

今、仏教思想って言わなかつたか？

沖田

言いません。

齊藤

言つただろ。どういう意味だ？

松原

こつちが聞きたいよ。

沖田

言つてないですから。

齊藤

おかしいな。

松原

じゃあ投げます。

齊藤

ちよつと待て。

松原

？

齊藤、松原の持つ賽子を間近で観察する。

齊藤

本物か…。

松原

何疑つてるんですか？

齊藤

…賽子すり替えたように見えたから。

松原

どうやって？ こんな、でかい！

齊藤 私を疑ってるのか。

松原 疑ってるの先生でしょ！ もう投げますよ。

齊藤 何でそんな急ぐんだ？

松原 急ぐって別に何も…。

齊藤 早く賽を振らなきや、まずいことでもあるのか。

松原 な、ないですよ。いい加減にして下さいよ！

齊藤 疲しいことがないなら何故そんなむきになるんだ。君の背後で誰が糸を引いている？

松原 沖田先生助けてよ。

永倉 松原先生で合ってるんです。

齊藤 ははん、さては誰かを庇ってるな。そうだろ、松原先生。…ていうか、自分、松

原先生か？

松原 何言い出すんだ、この親爺。

齊藤 そういう映画があつたよなあ。気づけば自分の周りの人間がほかの星から来た生き物に乗つ取られていく話。（あさって）おい、そこにいる奴、出て来いよ！

沖田 誰もいませんって。いい加減にして下さい。

暗転。

沖田 賽子を振り、出目の数進む。そして銀を剥がす。

齊藤 『人生最大の罪を告白する』

永倉 罪ねえ。

齊藤 多分、適當なことを言つても鐘は鳴ってくれない…かな。

永倉 始めて下さい。沖田先生。

松原、戻つて来る。沖田先生のお題の内容は止まつたマスを見て確認。

沖田 人生最大の罪? 何でこんなこと話さなきやならないの…。

齊藤 勿論、誰にも言わないから。

沖田 ええ? でも…。

齊藤 何だ、疑り深いな。

永倉
あんただろ。

沖田
…中学のときに、いじめがあつて。私も一緒になつて、いじめのグループにいて。
その子、転校生だったんだけど。その子に一万持つて来いって言つて。それで化粧品買つて。みんなに虐められてたから、その子すぐに転校して、それは一回だけなんんですけど。

三人
…。

沖田
話しました。

松原
…鳴らないな。

沖田
でも話しました。

永倉
だから鳴つてないんだって。

齊藤
それは先生にとつて本当に一番の罪なのか。

沖田
え？

齊藤
もつと罪深いことをほかにやつてるんじゃないのか。

沖田
もつとつて。

永倉
いつになく鋭いな。齊藤先生。この鐘つてさ、どういう仕掛けで鳴つてるのか知

らないけどよ。知能があるみたいだ。ここにいる四人の心の中を見透かしてゐる。

沖田先生言つてましたよねえ。何か目線みたいなものを感じるつて。
え?

もしかして、このゲーム自体が俺らのことを監視してゐんじゃねえか。

永倉先生。そんな非現実的な…。大体きょうは二十一世紀なんですよ。

わかつてゐよ。…何で今日つて限定…。自分でも言つててばかばかしいんだ。じゃあ松原はこの状況をどう説明するんだ。

まあまあ。理由なんて誰にもわからないじゃないか。

で、どうなんだ。

な、ないわよ。

ここであつたことはみんなゲームが終わつたら忘れること。沖田先生、確かに罪深い過去なんて、無駄毛処理の最中くらい覗かれてくないだろうよ。けど、ずつと黙つたままじや、日は昇らないんだよ。

だから私は。

それともここに永住するのか?

齊藤 沖田

齊藤 沖田

永倉 松原

まともなのが、おかしいのが、判別つかんな、この人。

あつても覚えてないのよ。

本當か。言えないだけなんじや。

どうしてそんなこと言うんですか。

沖田先生のためなんだよ。

…高校の頃、友達とグルになって、同じ塾通つてた大人しい子を脅して、援交勧めた。

私はその仲介料を〇万ずつ貰つた。

やつぱりあるんじやない。

何なんだよ！ この双六！

るさいな。でかい声出すなよ。

わ、若い頃の過ちは誰にだつてある。お、俺だつて一度はグルにならうと考えた

ことも…。

永倉

沖田

してるんでしょ。

慰めはよしてよ。明らかに狼狽てるじゃない！ みんなだつて心の中では軽蔑

してるんでしょ。

意味が違う。

永倉

沖田

齊藤

永倉

松原

沖田

してるんでしょ。

意味が違う。

永倉

沖田

齊藤

永倉

松原

沖田

してるんでしょ。

意味が違う。

永倉

永倉

そつだよな。可哀想なのは売春させられたクラスメートで、沖田先生はただの加害者なんだ。

松原

でも何でみんなの過去がこの双六にはわかるんだ？ 人格が備わつてるとしか思えない。

沖田

早く次振つてよ！ とつとと帰りたいのよ。

永倉

それが…、賽が動かない。

沖田

…何言つてるのよ。

沖田、永倉の代わりに賽を持とうとするが、重くて動かない。

松原

そつ言えば、鐘も鳴つてないですよ。

沖田

何で？ 話したじゃない！

齊藤

沖田先生、あるんじやないのか。もつと酷い罪がないわよ！ これ以上。

沖田

だけど、鐘が鳴らない以上、確かに先生の番はまだ終わってないってことに。

松原

沖田

ないって言つてるじゃない。その後は、まともにやつてきたんだから。昔の友達とはみんな縁切つて、過去隠して、大学でもちゃんと勉強して、誰に後ろ指指されることもなく、教師つてまともな仕事に就いて、生徒相手に授業してるじゃない！

鐘が鳴る。

齊藤

…鳴つた。

沖田

…遅れることなんてなかつたのに。

永倉

今、言つたからでしょ。

沖田

何よ！ どういう意味よ！

永倉

先生が子供を教育することが、一番の罪だということか。

松原

永倉先生！

永倉

俺じやない。この双六の代弁をしたまでだ。

沖田

あそ…。あつそ…。

ただ遅れてただけだ。気にするな。

齊藤

陰悪なムードの中で双六が続けられる。暗転。
明転。

松原 どうどう、ここまで来ましたね。
齊藤 沖田先生。

沖田、賽を振る。

三人 『出目の数』！

沖田、数を数えながら駒を進める。

松原 さあ、先生、銀を剥がして。
齊藤 ここまで来れば、酷い内容の命令が書かれてても、恐くないな。
永倉 怖いよ。

松原 悪いですって。

齊藤 何だよ、そんな。…怖いよ。うん。怖いけどさ。

沖田、微笑む。

齊藤 さあ、先生。

沖田 こんなにどきどきすること、最近なかつた。

松原 先生、早く。

沖田 ようし。

全員、見つめる。

齊藤 『ふりだしに、戻る』

全員。止まる。

齊藤 あれ、目が疲れてんのかな。

沖田 ははは。

松原 僕が読みますよ、えーと、『ふりだしに、戻る』

全員。止まる。

松原 あれ、目が疲れてんのかな。

沖田 ははは。

齊藤 俺が読もう。えーと。

永倉 もういいって！ 逃避するな。

松原 ……そういえば、今まで、これなかつたなあ。

永倉 何となくそんな気がしたんだよな。『出目の数』出たとき。

沖田 もう嫌！ 何で、こんなこといつまで続けなきやなんないのよ！ 馬鹿にするのにも程があるわ。ここまで来るので一体、何日かかったと思つてんのよ。くそ！ 沖田先生って、ホント引きが悪いですよね。

（松原の襟首を掴んで） そんなこと言つんだつたら、ここまで来てから言えよ！

松原

沖田

松原

ここまで来たってあがれなきや同じだよなあ。

あんた、まだ一度も半分超えてねえじゃねえの。あ？ ホント、よく言つよ。ひとつのお題クリアするのに六日もかかつくせによ。

だって『浮く』なんてお題、時間かかって当然だろ。てか、普通頑張ったって浮かないよ！

もう一度頑張ればいいだろ。

もう一度？ 次もまた同じ所に止まつたら？

そのときはまた。

沖田、急に狂ったように笑い出す。

沖田 何でそんな冷静でいられんだよ。

だって他に方法がないんですもの。

沖田 先生らだけで、勝手にすりやいいじやない。

沖田 あのねえ。順番守らないと、賽子、振れないの。誰かひとり欠けても続けられないと、だつてば。

松原 いんだつてば。

沖田

…もういい。もういい！ こんなゲーム。齊藤先生が見つけてこなかつたら、…
なことにならなかつたのに。

齊藤

沖田先生だつて、乗り気だつたじやないか。

沖田

こんなことになるつてわかつたら、ハナからやんなかつたよ。

永倉

そうやつて事態が悪くなれば、誰かのせいにするのか。おまえ、塾の子売つたときも、
そうやつて悪い友達のせいにして逃げたんだろ。

沖田

…。

永倉

答えろよ。

松原

永倉先生！

沖田

あんたは神か。

沖田、去る。

(永倉に) ちょっとキツ過ぎじやないですか。

松原

永倉君だつて結構言つてたよ。

松原

一緒にしないで下さいよ。確かに短気になつてましたけどね。あんた程無神経じや

ない。沖田先生出てつたじゃないスか。

いや、あれはうんこ?

松原 齋藤
松原 疑えたら何でもいいのか。

永倉、賽を振り、銀を剥がす。

永倉
永倉 『右手で右手首を掴む』か…。

松原 あ、それって、絶対不可能ですよ。

永倉 そうか?

松原 だつてほら、右手でどうやっても…。

永倉、試そうとする松原の右手首を掴む。鐘が鳴る。

松原 え?

永倉 自分のとは書いてない。

松原 ああ。

斎藤に賽を渡す。斎藤、駒を進めて銀を剥がす。お題は『によによる』。

斎藤
『によによる』？ 何だよ！ によによるって？ 動詞なのか？

その頃沖田、廊下で風に当たっている。

斎藤
私、どうすりやいいんだよ。

永倉
によによるしかないんじやないですかあ。

斎藤
だからによによるの意味がさ。

永倉、職員室を出る。

松原
ニュアンスでこ、ういう感じかなってないですか。私はありますけど。

斎藤
え？ あんの？

松原
自分なりによによるしか。

齊藤
ええ？

斎藤考える。そしていきなり、

齊藤 によによ――

鳴らない。

齊藤
違うか。…によ、によーん。

鳴らない。

松原 あもう全然駄目。

松原 齐藤 何、他人事と思つて。あんたもやれよ。
え?

齊藤

松原

齊藤

そんなんじゃないってわかるんだろ。じゃあ、やってみせてくれよ。

お、俺の番じゃないんですから。齊藤先生がやらなきや。

…によによによつ！ によによによによつ！ によによによによつ！

鳴らない。いろいろ試す。永倉、廊下の沖田のもとへ現れる。

沖田
自分で間違ってるの、わかつてた。でも…。

永倉
何で断らなかつた？

沖田
…。

永倉
自分で間違ってるってわかつてて援交勧めた？

沖田
あんたに関係ないでしょ。

永倉
関係ないことない。

沖田
いいえ。私と先生は全く無関係です。

永倉
俺の生徒だったんだよ。

沖田
？

永倉
おまえの言つ塾の友達。

沖田
永倉
え？

俺、最初は高校で教えてた。その子なあ、その事件以来引き籠もっちゃつてさ。見知らぬ親爺に犯されそうになつたから？ 違うな。友達に裏切られたからだ。誰も信じられないって。

沖田

怖かつたんだよ！ だつて、調子合わせなきや、すぐにこつちが外しの対象になる。もう、イジメられるのやだつたから。実際断つたのに、脅されてて。やらなきや、おまえ売るつて言われて。でも、どうしても嫌だつたから、あの子が本当にやられちやう前に、ホテルに着いたらすぐに、隠れてた私らが親父気絶させて金だけ取つて逃げたんだ。ホント言つと、そのこと、今日まで、全然忘れることができなくて。でも…。

永倉

…謝れよ。

…。ごめんなさい…。

沖田
永倉

俺にじやねえよ！ その子にだよ！ その子は今も、病院に通つてゐる。他人のためにこれ以上人生台無しにされたかないよな、もう二十五だ。普通の生活しながら、普通の生活続けるためにカウンセリング受けてるよ。行つて謝つて来いよ！ 自

分の代わりに犠牲になつてもらつてすいませんでしたつて、そんな私がのうのう教師なんかやつててすいませんでしたつてよ！

ううう…。

教師をやつてたことを言つてるんじやねえよ。のうのうとやつてることがだよ。…。

沖田 永倉 沖田 永倉

おまえさ、苛める側の気持ちも苛められる側の気持ちも知つてるんだろうが。おまえみたいな奴が教師になるべきなんじやねえの。双方理解できるんだからよ。…俺にはわからなかつた。それが公務員は安定してるだの、生徒に嫌われないよう要領がまさなきや馬鹿だの言つてるから鐘が鳴るんだろう。あの鐘で教師辞めるなんて考えてないだろ？

だけど。

沖田 永倉

まだ、その子が学校に来るとき…、仲のいい塾の友達の話を聞かされたことがあつた。その子は、ええと、明るくて、頭も良くて、ピアノ上手くて、人気あつたのに、自分みたいな地味でダサイのでも友達になつてくれて。…憧れだつたつてなあ。

沖田、しゃがんで、顔を手で覆う。

それが原因で、その学校クビになつたんだね。

•

やっぱそつちかな?
あれ?

…私がその塾の友達だつて、ここに赴任して来た時から知つてたの？

おお
親御さんから写真貰ってたから

何で今まで言わなかつた

絶處九彌力一力一之の不外先生の体 弓詩・吟詩画工

知れ大かく無理か

6

中日

永倉

私つて、いろんな人の人生滅茶苦茶にしてるね。

そうだね。

沖田 どうやつて謝つたらいいの…。

永倉 土下座研究会に相談してみる。

沖田 …戻つて謝る。

永倉 そ。

沖田 永倉先生…。

永倉 ?

沖田 私が教師辞めないために言つてくれてるんだろ。

永倉 …おまえが賽子振らないと順番止まんだよ。

永倉、職員室に戻る。

職員室。まだによによるを試しているふたり。

永倉 …まだ、やつてたのか。

齊藤 によによによーによによー！（そんなこと言つてもなあ）

松原 によによによーによー！（わからんいんですから）

永倉 わかんねえって。によによによによによによによと言われても。

齊藤

こんなのがわんねえよ。大体、卑怯だぞ。日本語じやねえだろ。この前もハングルで書いてやがったし。ていうかハングルが何かすら知らなかつたのに。あれ訳すのだって図書室に籠もつて…。

鐘が鳴る。

齊藤

だから何で鳴るんだよ。ああもう！

松原

まあ、でもクリアできたんだし。

齊藤

腑に落ちんわ。結局によによるつてわからないじゃねえか。今私の行動の何処がによによつてたんだ？ ああ、もう。

松原

まあまあ。齊藤先生、そんなによよらないで。

齊藤

ああ？

暗転。

明転。沖田のみ職員室。松原登場。お題は、松原の『卵まるのみ』。

松原

何処にもないよ。卵。くそ、まるのみじゃなくてもいいなら、購買部に玉子サン
ドがあつたのに。

沖田

すぐそこのスーパーにはあるんだろうなあ。

松原

すいません。沖田先生。もう、駄目だ。クリア不可能だよ。『卵まるのみ』。

沖田

何処かにあるって。絶対。

松原

だけどこれだけ捗してないんだ。食堂も購買部も家庭科室も教室も。

沖田

ほら、木を見て森を見ずって言つじやない。

松原

森って、そんな卵、あつても飲めないし。ああ、もう。

沖田

ヘコむの勝手だけど、イライラ外に出さないでよ。こつちまで気が滅入るじゃない。

松原

イライラもするでしょが！ こんな毎日繰り返してたら。買い物にも行けない、

沖田

パチンコも行けない。セクキャバもデリヘルも。

：

松原

そうだよなあ。いつまでもこんな禁欲続くわけないよなあ。沖田先生、もし、僕
らが帰ることができないなら、選択肢つて限られてますよねえ。

沖田

何の話？

松原 いいでしょ別に。

松原、沖田に近づく。

沖田 近づかないで。

松原 元に戻つても、あの話、黙つてますから。

沖田 卑怯者。

松原 好きなんです。

沖田 短絡的過ぎ。やめて。

永倉、ふたりの状況を扉の陰から覗いている。

沖田 永倉先生。

ふたり、飛び起きて、離れる。

永倉 席外してたほうがいいですか。

沖田 違うの！ 松原先生が無理矢理。

永倉 ええ。それは見てましたから。

（永倉に言い訳するように）だって、こんななんだ。仕方ないでしょ。
うん。仕方ない。

沖田 ちよつと。

永倉 でも、抜け駆けはするい。俺も齊藤先生も性欲、表面張力起こしてるよ。

沖田 ちよつと！

松原 あんたと違うよ。気持ちがあるからこそ…。

永倉 長年最膚にしているダツチワイフにだって情は湧きますよ。

沖田 ダ…。

松原 一緒にするな。

永倉 あつたよ、卵。

松原 え？

永倉 理科室に飾つてあつた。

永倉、松原に卵を渡す。

松原 飾つてつて…、これ何の…。

永倉 ユーレイカレエダカマキリ。

松原 カマ…。

永倉 マレー半島に生息だつて。そつなんだよ。別に『鶏』つて限定されてないんだ。卵は卵。

松原 俺の着眼点を褒めて下さい。薰製つて書いてたぐらいだから食べられるでしょ。

永倉 何言つてるんですか、これ、剥製じゃないですか！

松原 ああ、剥製つて読むの？ あれ。他にないんだから、仕方ないっしょ。

永倉 こんなのは食えるわけないじやないスか！

松原 生きてる方がよかつた？

永倉 どつちにしたつてカマキリなんて。

松原 食わなきや、鐘鳴らないんだから。

永倉 だつたら先生これ食えますか！

松原 てめえのお題だろ。

永倉

松原、びびる。

永倉 はい、アーン。

永倉、少ししか開けない松原の口に卵を無理矢理押し込む。松原、飲み込む。鐘がなる。

永倉 お、頑張った。

松原、吐きそうになるのを慌てて手で押さえて、職員室を出ようとすると「ころへ。齊藤急いで戻つて来る。」

齊藤 博多研究会の部室に、明太子が入つてたんだけど、これもたまごだよ！ 松原君！

松原、恨めしい苦笑を浮かべて教室を出していく。

あれ？

齊藤 あ、もうクリアしました。

永倉 そうなの？ 何だ。いい着眼点だと思ったのに。

永倉 松原先生は立派でした！ はい次、沖田せんせ。

。。

沖田

何？早く賽子放れよ。

永倉

うん。

沖田

暗転。

明転。斎藤の駒、あがりのすぐ側まで来ている。松原、腹痛に苦しむ。

沖田

よし。

斎藤

『一度だけ、命令をパスすることができる』これも残つてる。

永倉

ええ。

松原

斎藤先生、さあ、賽子を。

斎藤、目頭を押さえる。

永倉

斎藤先生？

齊藤、みんなに頷いて賽を振る。

齊藤
『出目の数』。

※六なら

全員 行った！

※六以外なら

全員 惜しい！

沖田 『ふりだしに、戻る』……齊藤先生！

齊藤 ……パ……ス。

鐘が鳴る。全員、肩を抱いて喜び合う。

これであとひとつ。何を出してもあがり。

ええ。取説にも、オーバーしてもあがりだつて書いてます。

本当に書いてるのか？

何でそんなこと…。

今、ろくに見ないで書いてますなんて言つからや。

書いてるでしょ、ほら。ほらほらほら！

これ松原君書き足してないか？

活字でしようが！

まあまあ、そんなによらないで。

によによつてない！

そつか。遂にここまで。これで本意に反して疑うこともしなくていい。

自覚はあるのか。…これで、今度こそ。間違いなく、確實にあがれるんスね。痛てて。

ちよつと、その痛がり方、普通じやないんじやない？

腹の中で孵化したんじやないか？

え？

松原

松原

松原

松原

松原

松原

松原

永倉

齊藤

齊藤

齊藤

齊藤

齊藤

永倉

松原

松原

松原

松原

松原

永倉

永倉

永倉

永倉

永倉

永倉

永倉

松原

松原

松原

松原

松原

永倉

松原

松原

松原

松原

永倉

ちっちやいカマキリが、外に出たいよーってさ、お腹の中、ちょっとずつ切つて
るんじゃないか。

松原

辞めて下さいよ！

永倉

ちっちやいのがうよ、うよいるのと、これくらい（赤子サイズ）のが一匹宿つて
るのとどっちが嫌？

松原

どつちも嫌！宿つてるって言つな！痛ててて。

齊藤

辛いならツツコまなきやいいのに。

沖田

やつと元に戻れる…。

永倉

まだ泣くなよ…。もうちょっとだろ。

沖田

うん。

齊藤

松原君。

松原、賽を振る。

『出目の数』。

全員

いち、に…『出目の数』。

『右隣の人の頬を抓る』

沖田
松原
斎藤
松原先生、いつも同じ所に止まるんだもん。
何回抓つたか、もう、数えられないですよ！

（笑顔で）六回。

：覚えてるんですね。でも、これで最後なんですね。じゃ、失礼します！

松原
斎藤
松原
斎藤
（腹痛）。

鐘が鳴る。

松原
さあ、沖田先生。

沖田、賽を振る。

沖田
『出目の数』。

全員 いち、に、：『出目の数』。

沖田、みんなのかけ声に合わせて赤い駒を動かす。沖田、銀を剥がす。

齊藤 どうしたんですか、沖田先生。

沖田 目が涙で。

嘘？

だから何でそんなところで嘘つかなきやならないんですか。最後までこの調子？

沖田 齊藤先生、読んで下さい。

ええ。

問。

齊藤 沖田 齊藤先生？
『全員、ふりだ：』

斉藤の台詞を遮るように、突然バッドエンディング的曲が流れ。永倉、斉藤、松原、スローモーションロパクで嘆きの演技。が、沖田の次の言葉が曲を止める。

沖田 待って！ 私も残ってる！

松原 …え？

沖田 だから、私も残ってるんだって！『一度だけ、命令をパスすることができる』権利が！

間。

斉藤 え？

沖田 だから、バスでさるの！

斉藤 嘘？

沖田 ホントだって！

間。

全員

ふううう。

あああ、ビックリしたあ。大体、何でこんな『全員ふりだしにもどる』みたいなのが最後まで開かずに残ってるんだよなあ。

齊藤
じゃあ、沖田先生。当然？

沖田
バスします！

鐘が鳴る。全員、息を整える。

松原
永倉
ういっす。

齊藤
なあ、戻つたら、打ち上げしねえか。

松原
賛成！

松原
永倉先生がクリアしたら、あとは齊藤先生が賽を振るだけ。では、永倉先生。

沖田
齊藤
…あそつか。忘れてた。

松原
…でも、その前に病院連れてつて。

齊藤
…もう少しの辛抱だよ。

永倉、賽を振る。永倉、出た目の分だけ駒を進め、銀を剥がす。後の三人は話に気をとられている。

沖田

齊藤

沖田

齊藤

元の時間だと何時位になるんだろう。ほら、開いてる店あるかなって。
駅の方に出たらあるだろ。

駅か。長いこと行ってない。

どうだか。

松原

沖田

松原

齊藤

松原

松原

松原

鐘が鳴る。永倉、動かない。

ここまで徹底して疑い深いと却つてよくなってきた。駅高架の工事してたの、綺麗になってるんじゃないスか。

だから全然変わってないんだって。

あ、そつか。：イテテ。

いろいろあつたな…。ホント、みんなお疲れ様でした。

松原・沖田 お疲れ様！

齊藤 いよいよ私の番だな。

沖田 あれ？ 永倉先生いつの間にクリアしたの？

永倉 ։。ああ、おう。 樂勝樂勝。

齊藤 野郎共行くぞ！

松原 おおお！

沖田 永倉先生？ 何て書いてたの？

永倉 え？ ああ。『思い出し苦笑いをする』って。

沖田 本当？

永倉 ほんと？ あのなあ、沖田先生まで齊藤先生の伝染ったのかよ。

永倉、さりげなくマスを隠している。永倉が嘘をついていることに気づいている沖田。

沖田 松原先生！

松原、確かに容態が悪化している。永倉、松原の方に気を取られる。しかし、沖田が叫んだのには別の目的があった。永倉の油断を誘うという目的が。

沖田、素早く永倉の手をとけ、百人一首の手練れさながら、永倉が隠そうとしていたマスから距離を置かせる。

沖田　：『思い出し苦笑いをする』は出たよ。序盤で。この双六、二つと同じ文章は書かれていない。教えてくれたの、永倉先生よ。

沖田、マスに書かれた文字を読む。

『一巡するまで、全ての効果を受け付けない』

沖田　永倉

沖田　嘘…。

齊藤

…。

沖田

…。

松原

そんな…ばかな。

永倉

ハハハ。

沖田

…どうしよう。

これって沖田先生の『今後一度だけ、全員の駒を先頭の駒のいるマスまで移動できる』権利も永倉先生には無効ってことか？

齊藤

考え方。

松原、腹痛が酷く、虫の息。

永倉

…みんな、先にあがつてて下さい。

齊藤

…いいのか？

沖田

いいのかじゃないよ。齊藤先生がここまで来れたの、永倉先生のアドバイスがあつたからじゃない。それに、私が『今後一度だけ、全員の駒を先頭の駒のいるマスまで移動できる』のマスに止まつたとき、全員である作戦を考えたのも永倉先生だよ。それをいいのかつて。あんまり過ぎるじゃない。

齊藤

だったらどうすんだ。振らなきや、待つてるだけでどうにもならないし、賽を振つたら、その時点であがり決定なんだ。

沖田

…わかってるよ。…だけど、こんな形で、権利使えない。

齊藤

何言つてるんだよ。この期に及んで。

沖田

権利は私にあんの。

永倉

沖田先生。権利使え。

永倉先生？

しゃーねえよ。こんなマスに止まつた俺の運がなかつたんだ。
嫌だよ。

あのなあ。次に誰があがるのにどれだけかかると思つてるんだ。齊藤先生、賽を振つ
て下さい。
けど…。

…考える時間もないの？

永倉 齊藤
（首を振る）このままだと、松原先生が死んでしまう。
ていうか、死んでるんじゃないのか。

永倉 生きてるよ！ そこまで疑うな。

齊藤 …もう、賽を投げるぞ。

永倉 沖田先生、権利を使うんだ。
沖田 でも…。

永倉 齊藤先生、お願いします。
齊藤 …わかつた。先に行つてる。

齊藤、賽を振る。賽の目は何が出てもいい。

齊藤

『出目の数』

齊藤

…いち。

齊藤、駒を進める。

齊藤

…あがった。

鐘が長い間鳴り響く。

永倉

沖田！ 権利の行使を！

沖田

先生！

永倉

早く！

沖田、お守りの千年アイテムを永倉に託す。

永倉

聖ボキール医大。そこで毎週土曜日カウンセリング受けてる。ちゃんと謝つて来
いよ…。

沖田

先生…。

沖田、永倉から離れる。

沖田

全員の駒を先頭の駒のいるマスまで移動できる権利行使！

三つの鐘が鳴り響く。松原は意識を失い、齊藤に抱えられている。

永倉

…。

沖田と齊藤、永倉と対峙し、じっと見つめている四人とも最初と較べて遙かに格好良い。永倉小さく手を振る。去りゆく三人。見送る永倉。暗転。

明転。現実時間に戻つて来た沖田達三人。齊藤は松原を負ぶつている。

沖田

永倉先生…。

齊藤

救急車呼ぶより、松原君の車借りた方が早いな。沖田先生、（松原の）ポケットか

ら車のキー出して。

沖田

うん。

齊藤

サンキュ。じゃ、行つて来る。

沖田

お願ひします。病院着いたら何処の病院か教えて下さい。

齊藤

こいつの実家に連絡頼むわ。入院の手続きとかしなきやならんんだろうし。

齊藤、松原を担いで出て行く。

沖田

…だけど、永倉先生のことみんなにどう説明すれば…。実家の親御さんにも何て

言つたら、だあびつくりした！

沖田振り向くと永倉がいる。更に荒んだ格好で。永倉、沖田の大声で初めて沖田に気づいた様子。

永倉 よう。久しぶり。

永倉先生、何で？

何でって、やつとあがつたから。

え？ だって今別れたばっかじや…あ。

はあ。滅茶苦茶頑張ったのに。

車のエンジン音。

永倉 二人は元気にしてる？

沖田 松原君を病院に、今ほら齊藤先生が車で。

永倉 まだ病院？ お腹痛治つてないの！？

沖田 ああややこしいな。

永倉 何かね。

沖田 だつて、ほんの十分前になん泣くわ喚くわして…。

永倉 こつちは。丸二年ね。

沖田 ずっと待つてたよ。

永倉 はいはい。十分な

問。ふたりとも次の言葉を考えている。

沖田 私達が帰つてから大変だつた？

永倉 もう。後でゆっくり話すけどね。あの後変なお題ばっかで大変だつたのよ。

沖田 何でお姐言葉？

永倉 ああ、ずっとこれだつたから。癖になつちやつた。一年も経てば変わるよ。…一年ずつ
と考えたんだけどさ。

沖田 うん。

永倉 僕…。

告白モード？

沖田 …え？

永倉 宗教起こすことにした。

…え？

沖田 永倉

ずっとひとりで暇だったからさ、悟りとか開いちゃって。教祖松原に頼むことにした。あいつ浮けるし。

何で！

間。ふたりとも笑っている。

沖田

…お帰り。

永倉

…ただいま。

暗転。幕。